

# 幼児教育における「造形表現」の重要性について ～保育現場での実践を通しての考察～

Speculation on the importance of formative expression in early childhood education  
based on my experience at my nursery school

立石 知恵美  
Chiemi TATEISHI

## I. はじめに

2018（平成29）年、「幼稚園教育要領」が改訂され、次のような事が確認された。

まず、幼稚園教育は「環境を通して行う教育」であることを基本とし、①幼児の主体的な生活を中心に展開するものであること。②あそびを通じた総合的な指導によるものであること。③幼児一人ひとりの発達や個人差に応じるものであること。の3つの柱がしめされたのである。さらに、「幼稚園教育要領」の第1章第2では幼稚園教育において育みたい資質、能力「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕として明確化されたのである。また、学校教育法の第7章第77条に、幼稚園は幼児を保育し、適当な環境を与えてその心身の発達を助長することを目的とする。と「環境による教育」が幼稚園であるということが記されている。そして、「心身の発達を助長すること」が目的であると述べられている。

保育者は「10の姿」の「姿」を念頭におきながら、一人ひとりの発達の特性に応じて遊び中心の生活環境の中でそれぞれの興味、関心に寄り添い、発達に必要な体験、感性を育む活動を取り入れ保育を行うことが必要とされる。

10の姿と記されている項目は①健康な心と体②自立心③共同性④道徳性、規範意識の芽生え⑤社会生活との関わり⑥思考力の芽生え⑦自然との関わり、生命尊重⑧数量や図形、標識や文字などの関心、感覚⑨言葉による伝え合い⑩豊かな感性と表現である。項目の内容を記すのは省くが、その内容は全て保育内容の5領域に、通じている。

特に、5領域の表現の造形表現は3つの柱や10の姿を念頭に置いて保育を実践するにあたり、とても重要な領域と考える。筆者は自身の40年に渡る保育実践の下でそのことを実感すると共に実証してきたつもりである。

特に、ありのままの子どもの表現を如何にして表出するのか、造形活動を通して子どもの心をはぐくむのか、ありのままの表現を受け止める側が如何にしてとらえるのか、保育者の資質、能力、保育内容が問われる領域、それこそが造形表現であると考ええる。

## II. 研究、目的と動機

筆者が実践してきた全ての造形活動（あそび）が、すべての子どもの心の育ちを助長できていたかは、疑問である。なぜなら、現代社会に生きる子どもは、環境や背景、特性が多様である。筆者

が出会った子ども達も多種多様であった。一人ひとりの発達、個性、背景を把握し、理解に至るまでには、子どもとの信頼関係が根底にあることが必要不可欠だ。その関係を築き上げるには、適材適所の関わりを積み重ねなければならない。そこには保育者の資質と能力が問われる。すべての子どもにそのようにできたかという、できたとは断言できない。それだけ、保育という仕事は深いものだと、筆者は思う。

筆者の、基本的な問題意識として、ありのままの表現を如何にして表出するのか、そして、それを受け止める側のとらえ方によって、子どもの心の育ちが大きく左右されると考える。しかしながら、多種多様な保育現場でどこまで、子どもの心の育ちを念頭に置いて造形表現活動がされているのかと疑念がある。

そこで、幼稚園教育要領の「3つの柱」と「10の姿」に記されている保育のねらいに達する可能性や子どもの内面の育ちにどこまで入っていけるのかまた、どのような造形表現あそびが子どもの心の育ちを助長するのかということを経験者の実践活動の報告、研究の課題とし、目的とする。

### Ⅲ. 先行研究レビュー

幼児教育における、造形表現あそびは作品を作るという過程よりも、できばえ（結果）にばかり、重きが置かれる危険性がある。たとえば絵画なら、テーマそのものが分かりやすく、上手く模写された概念的なものが良い作品と思われやすい。造形物もそれに然りだ。しかしながら、筆者は、幼児教育における造形表現は、子どものあそびそのものだと考える。上手く描こうと、頭で考えず、心で感じたこと、ありのままの感性を無我夢中で表出することこそが、幼児教育における絵画表現だ。また、物作りにおいては、作る過程、時には友達と共に、何度も試みたり、失敗したり、やり直したり創意工夫を繰り返すその過程にこそ、意義があると、筆者は考える。

松岡も「美術は、「今、過程に生きる」活動である。」と考える。と、こういうふうには書くと、違和感を覚える人もいないのではないのでしょうか。保育者や教員を目指している学生たちも「えっ、美術って作品を仕上げるのが目的ではないのですか？」と口をそろえて言います。しかし実は、美術とは、描いたり、作ったりしているその行為そのものこそが、目的である活動なのです。と論じている。〈松岡 2017〉

また、松岡はこのようにも論じている。美術は「あるがままからスタートする」活動である。空は何色でしょうか？地面は、山は、何色でしょうか？—空は決して青ではありません。地面は茶色ではありませんし、山は緑ではありません。空を見上げてみれば、実際にはもっともっと複雑で微妙で、不思議な色をしています。(中略) 空は、青だと頭の中で概念化して、ためらいなく青色の絵の具に手を伸ばしているようでは、目の前のあるがままを見落としてしまいます。(中略) 固定概念にとらわれといると、「事実」を取り違えてしまいます。あるがままからスタートするのが美術です。〈松岡 2017〉

また、佐々木も、たいせつなことは、生き生きと楽しく意欲的に考え、行動し、学ぶという感性の習得なのです。そのときにはそのときに、好奇心をいっぱいもって、自然などの周囲の対象を探索しながら「感じ」「考え」自分の生命充足感を体験する習性は、大きくなって急にできるものではありませんと論じている。〈佐々木 1998〉

また、子どもの心身の発達を助長するものは、机上の上での知識よりも、生活そのものの中にある学びこそが大切と考える。つまり子どもが、ありのままの自分を、安心して表現できる環境があり、そこで様々な経験を積み重ね、成長していく。正に生きた教育こそが子どもの自己肯定感を育て、心の育ちを、助長すると考える。その環境の一つに保育者の関わり、ものとのとらえ方、考え方つまり、保育者の資質と能力がある。保育者はともすれば、子どもを自分の保育観の枠の中にはめ込もう、自分の保育計画どおりに、物事が進むことがよい保育と考えがちだ。しかしながら、そのようなとらえ方では本来のありのままの子どもの姿を見落としてしまうのではないかと考える。

倉橋も、幼稚園の目的のいいのは誰でも知っています。しかし、教育者は一般に、目的に偏りやすい悪い癖を持っている。特に、幼児教育者においてはそのことを大いに反省すべきではあるまいか。また、倉橋はこうも論じている。幼稚園の真諦は、何を保育の目的とするか、いかに能力に相当させるかということだけを考えるのではなくして、いかなる生活形態に幼児を生活させるのか、幼稚園の真の姿、実体あろうかということではなければならないのです。

(前略)しかし、子どもが真にそのさながらで生きて動いているところの生活をそのままにしておいて、それを幼稚園に順応させていくことは、なかなか容易ではないかもしれない。しかし、それが、本当ではありますまいか。少なくとも幼稚園の真諦はそこを目指さなければならないと、私は固く信じているのであります。(倉橋 2008)

#### IV. 実践内容の源流

##### 1 廃材を使つての家づくり

活動の報告の前に、筆者が勤務していた桃陵保育園の概要を記したい。

桃陵保育園は、京都市の伏見桃山にある市営住宅内にある。2018年10月末に亡くなられた木村量好先生によって1965年に設立された。キリスト教社会運動家の賀川豊彦が創始者であるイエス団を経営母体とする保育園で、まず乳児保育園としてはじまり、その後、当時の保護者会が署名運動をし、市に働きかけ幼児部となる桃陵保育園ができた。

桃陵乳児保育園、桃陵保育園は、創設期から、保育における造形表現を積極的に推進してきた。また木村量好先生は、全国幼年美術の会(保育者、教員が造形表現について学ぶ研修会、美育文化協会後援)の副会長として長く指導にあたり、その薫陶は同園の保育者にとどまらず伏見保育士会、京都市保育士会など子どもに関わる多くの方々にいき渡った。

また、その一方、母体となるイエス団の理念に基づいて、子どもは無論のこと、大人、お年寄りなど、弱い立場に置かれている人たちに積極的な姿勢をもち、何の支援、保障もなかった時代から、統合保育、長時間保育、産休明け保育、学童保育を始める。つまり、居場所のない人の居場所を作り、子ども一人ひとりを大切にするという保育の王道を地道に積み上げてきた園である。

桃陵乳児、桃陵保育園の造形表現は、あくまでも子どもの日常のあそび、生活を重きにおき展開する。あそび、生活の中で、夢中になったこと、友達と創意工夫し達成したこと、しなかったこと。嬉しかったこと、楽しかったこと、悔しかったこと、心が動かされて、耕されたこと、正だけでなく負の心の感情もあますことなく、一人ひとりの内面から溢れ出るありのままの表現を目指している。

また、材料用具も廃材や自然物を使うことが多い。整った形に捉われず多様な形、物、色、デザインなどを利用し創意工夫を重ねる、その過程にこそ造形表現の本来の意義があると考ええる。

筆者が実践した造形表現はあくまでも、固定概念を崩して、子どもの内面から、溢れ出る自由な表現を目指していた。それが、桃陵乳児、桃陵保育園の創始者木村量好先生の信念であり、同園の造形表現の目標でもある。

固定概念を、崩し、子ども独自の発想、工夫がされやすい材料用具として、使いやすいのが色々な形、色、デザインのある廃材であると、筆者は考える。お菓子や、食品の空き箱、牛乳パック、ヨーグルトやゼリーの容器、そして、様々な大きさの段ボール箱など、この世の中には本当に色々な廃材が、存在する。筆者が実践したこれから、紹介する一連の活動は廃材集めから始まる。

桃陵保育園2018年度年長さくら組が約5ヶ月に渡ってあそび、生活した造形表現あそびを紹介したい。

2018年さくら組（5歳児）、38名に担任は3名、比較的長時間保育の子どもが多く、早朝から夕方遅くまで半数以上の子どもがいた。また、支援のいる子どもも数人いて、療育に通う子どももいた。クラス全体として、活気に溢れ、いたずらやもめごと日常茶飯事であった。物静かで、自己主張が苦手な子どももいたが、また、それぞれ自分のあそびをもち、特に、物作りをするのが好きなクラスであった。お話、紙芝居などが好きな子どもも多く、毎回、集中して聴いていた。つまりは、個性豊かないろんなタイプの子どものいるクラスだ。

今回の活動は、運動会が終わった10月半ばから始めた。題材に使ったのは絵本「くすのき団地は10かいだて」（作 武鹿悦子、絵 末崎茂雄）である。くすのきで出来ている10かい建ての団地に、様々な動物が暮らしている。どの動物も何かしらの仕事をもち、日常の中でちょっとした困りごとがおこるのだが、住民が力を合わせて解決していくお話である。

筆者の、当初の目的は、家づくりをし、あそびこんで、お話の絵を描くことであったが、その目的は活動の過程の中で、どんどん変わっていった。

桃陵保育園の散歩コースの一つに、桃山御陵（明治天皇伏見桃山陵）がある。広大な敷地に木々が立ち並び、参道に一步踏み入ると、森の香りに包まれる。自然たっぷりの森である。当然のことながら、くすのきも沢山、立ち並んでいる。森の一角に、根っこの下の土が、自然の力で削られて、本来なら土の中に埋まっている根っこのさまが、見えるところがある。大木が立つ姿が、まるで断面図を見るように見られるのだ。その姿を見た時にはどの子どもととも、驚き、感動する。

子どもたちに、何度かくすのきだんちの絵本を読んだ。「くすのきだんちってどんな感じかな？」「そもそもくすのきってどんな木やろ？」「10かいやったらうちのマンションより高いわ。」とくすのき団地に興味が湧いて来た。

くすのき探すと、称して、桃山御陵の森へ出かけた。そして、何本も木を見上げ、森を散策、そして、根っこへとたどり着く。その大木の様に改めて大きさ、迫力に驚き、感動していた。

「くすのき団地をみんなで作らない？」と、筆者が投げかけると、作りたいとどの子どもやる気を見せた。「作るだけでなく、そこで、ご飯を食べたり、お昼寝したり、遊んだりするのはどう？」「えっ、そこで、お昼寝もするの？面白そう。」「そう、そこで生活するの」

次の日から、早速、材料集めが始まる。保護者にも募ると、最近引っ越しをされた保護者が沢山

の段ボール箱を持って来てくれた。ほとんどが同じ大きさで、おあつらえ向きであった。38名を6つの動物グループに分けた。そのグループで、作業をし、生活をする。

まずは、どの場所にどのグループが家を作るか、いわゆる敷地決めである。そして、生活しなければいけない家なので、頑丈に作らなければならないことを伝える。3匹のこぶたの話を、持ち出すと、「のりを使おう」「箱を積み上げていくのがいい」「一番下の箱は動かないようにする」「重くなるようになんか入れよう」と土台になる段ボール箱には、粘土や図鑑を入れることにする。丈夫で長持ちするものを作る。物作りの基本を、実践で学ぶ。

10月22日、いよいよ整作スタート。まずは段ボールを箱にしなければならない。箱を作るため、布テープを渡す。いつの間にか、箱を抑えるものとテープを貼り付けるものに分かれて、役割分担される。土台になる箱には、粘土や図鑑を入れるのもそれぞれが、やり始める。しかし、グループによってはなかなか作業が進まない。そこは、保育者が入り少しだけ手伝う。また、作業の進んでいるグループの様子を「見てごらん」と促す。



箱が沢山できると、次に少し水で薄めた木工用のボンドと刷毛を渡す。箱と、箱をより頑丈に繋げるには、ボンドで張り、つなぎ目は布テープで張る。どのぐらいの高さにするのか、どこを入り口にするのか、また、通り道はなど、色々と子どもたちに問いかけると、「入り口はここにしよう、窓はこの辺りかな」「あんまり高いのは、危ないな」と考え始める。少し、家の姿が見え始めた。



10月25日、壁紙を貼る。壁紙に使うクラフト紙も、保護者からの提供品だ。書店に勤務していた保護者が本を包むクラフト紙を、大量に提供してくれた。本を包む紙なので、適度な大きさで、扱いやすい。これもおあつらえ向きである。特に、箱と箱のつなぎ目に、貼ることを伝える。張るばかりの単純な作業に、少しあきてきて、集中が途切れてしまう子どももいるが、励まし、何とかやる気を繋ぎとめる。壁紙を貼る作業は、2日に及ぶ。

10月26日、壁紙の貼り付けが、終わり外観ができる。しかし、各家の中には何もなく、殺風景である。「家の中の物も、作らなければ」と誰ともなく意見が出る。「キッチンいるなあ、テレビもある。テーブルに椅子は？」とそれぞれに、自分の家のイメージで、生活必需品を口にし始める。その生活必需品を作るため、再び廃品の品を集め始める。

## 2 生活する中での工夫

10月下旬から11月中旬にかけて、集めた廃品での、物作りが続く。牛乳パックや様々な箱（お菓子、石鹸、入浴剤、おもちゃ、ケーキ、etc）を使いキッチン、時計、テレビ、携帯電話、パソコン、





電子レンジ、冷蔵庫、本棚、おもちゃなど。それぞれの家に色々なものができあがる。壁にパスで、直接窓やカレンダーや、額縁つきの絵を描いているグループもあり、日ごとに、家らしくなっていく。物作りは、子どもがやりたいと思う時、いつでもできるように、廃品と材料用具を、常時置いておいた。

机は、牛乳パックや箱の蓋などを利用し作っていた。それを使用して食事をとる。(コロナ禍の中では有り得ないことであるが、2018年コロナ前の話である。)メニューが、2品の時は、まだ大丈夫だが、3品の時には、食器を置くのにかなりの工夫がいる。食器以外に、コップも置かなければならない。どうしても、コップがこけて、お茶がこぼれてしまう事が何度か繰り返された。そんな時、ある子どもが、牛乳パックを底から15センチ位のところから切り取り、コップ入れを作り、箱に貼り付けた。そこに、コップが上手く入り込み、ほぼこぼれない。そのコップおきは、瞬間に流行り、ほとんどの子どもがそれを作っていた。



また、何度か汁物をこぼしてしまうと、当然のことながら紙の箱で作る机は、少し凹んでくる。へこむと食器をおいても斜めになる。そういう机も、また、段ボールの板を上から貼り付け修正するのも子どもが考えていた。また、汁物がこぼれても大丈夫なように、防水加工するため、透明のビニールテープを、表面に沢山貼り付けている子どももいた。また、凹んでいる部分の形状を利用して上手く、食器を置いている子どももいた。それぞれ、こうしてみたらどうかと、色々と試しながらマイテーブルを使用していた。

それらの、子ども自らの工夫する姿を見た時に、作ったものを使い生活することにより、生まれる智慧、アイデアであると筆者は感じた。

郵便ポストを、あるグループが作ると、それも瞬く間に流行った。どの家にもポストと表札のようなものができ、手紙の交換あそびも、あちこちでなされた。がそのうち、友達の悪口を書いて出す子どもが出始め、みんなで話し合いを持ち、手紙の交換ごっこは、やめることになった。



11月の下旬に、当初の目的の、くすのき団地の絵を描いた。障子紙に墨で木を描き、絵の具で色を付ける。どの子ども自分のイメージするくすのき団地を描いていた。とても、子供らしい絵が多くほのぼのとした表現が沢山出ていた。

時は、流れ12月を迎えた。桃陵乳児、桃陵保育園は、キリスト教の保育園である。当然ながら、クリスマスにはページェント（生誕劇）を、学童以外の全園児で行う。（学童は、学童のみで別日に行う）そのページェントを、リードしていくのが、年長クラスの役目だ。当然、乳児の頃から何度も経験しているとはいえ練習は必要だ。当初、筆者の中では家づくりの活動は、秋の間で終わり、くすのき団地をテーマにした絵を描いたら、一区切りにしてページェントに向かうはずであった。家を潰して部屋を元の状態に戻し、壁面に、馬小屋を作り、クリスマスらしい装飾をし、クリスマスを迎える気持ちを高めて行こうと思っていた。しかしながら、家づくりを楽しみ、そこでの生活が当たり前になっている子ども達に、クリスマスだからそろそろつぶさない？とは言いづらくなっていた。

色々と思案しているうちに、家そのものを馬小屋風にアレンジしてはどうかと思いついた。子ども達に提案すると、「それ、いいな」と、乗ってきた。

そして、家に雪を沢山降らせた。その雪もシュレッターの紙を使い、究極の廃品の雪景色となった。

「馬小屋に、屋根もほしいな」ということになり、キャンプの時に作った手作りテントの布を利用して、天井から吊るすように屋根も設置した。

年も明け、1月中旬その冬も寒い日が続いた。時折、バケツの水や川までも凍った。そして、「南極に行こう」（詩新沢としひこ／曲中川ひろたか）の歌が流行る。前歯がガチガチする朝は風に耳をすませてね。どこかの空で呼ぶ声が聞こえてくるはずさ。南極に行こう。南極に行こう。地球の果て、白い天国。冰山浮かぶ海、白熊が僕らを、待っている。（2番省略）という歌詞で、子ども心をくすぐる。メロディーも、心地よい。それをきっかけに、氷に興味関心が湧いてきた子ども達に、今度は氷に家の変えようと提案すると、「氷ハウス！住んでみたいな」と、またまた、乗り気になった。氷色に家を塗った。たちまち、そこは氷の世界になった。そして、こたつをつくるグループもあり、まるでかまくらのようだった、

月日は流れ、いよいよ卒園を迎える3月。流石に、もう家は解体するしかない。「もうすぐ、みんなは卒園して、1年生になるよね。そして、次のさくら組のために、部屋を綺麗にしないといけ

ないので、家をつぶします。」と伝えた。「えっ、どうして！イヤ！」という声上がるかと思えば、「やったー！つぶそう」とどの子ども嬉しそうに声を上げる。少し意外な反応に拍子抜けする。あれだけの歳月を使い、作った家だったが、ものの1時間くらいで見事に解体された。子どもにとってはつぶすのもまた開放感に満ちたあそびなのだと思えば改めて感じた。

保育室は、机と椅子が並べられ、すっかり元に戻った。それから2、3日してからの事。ある子どもの保護者から、こんな話を聞いた「最近、うちの子どもが、園に行きたがらないのです。どうしてと理由を聞くと、『今の真面目な部屋は嫌だ、面白くない。前のくすのき団地の保育園が良かった』と言うのです。」その話を聞いた時、何とも嬉しい思いに筆者は駆られた。その子どもにとって、くすのき団地の活動は、楽しみな日常、生活そのものになっていたのだと感じた。

それからは卒園式に向けて色々な活動が始まり、その子どももまた、切り替えて登園してきた。こうして、およそ5ヶ月におよぶ「くすのき団地」での、物作り生活も終わりを迎えた。

この活動の様子は、「くすのき団地の日々を紡ぐ」というタイトルで『美育文化 ポケット 第21号』（2019年3月発行）に掲載された。

## V. おわりに

くすのき団地の活動を通して、筆者は改めて幼児教育における造形表現は、できればや、結果ではなく、作りあげていく過程にこそ、意義があると実感した。

毎日の生活で使うものであるから、頑丈に作ろうとする。では頑丈にするにはどのように作ればいいのかと、考える。また、使う間に、弱くなったり、壊れたりするが、それをどのように修繕すればよいかと考えいろいろと試す。時には、一人で、時には、友達と智慧を出し合う。そして、失敗してまた作る。その積み重ねだ。また、いろいろな形や、大きさ、デザインのある廃材を使うことで、様々な発想が生まれる。それは、保育者が事前に準備万端整えた既成概念の形の材料で作るものからは、決して生まれないものだ。

そこには、子どもの自由な発想と、主体的な意欲が生まれ育つ。また、お互いに智慧を出し合うことで人の意見を聞き入れ、自分の意見を出して多様性を認め、協調性や助け合う心も育つ。

保育者が先行して、計画どおりに、目的にばかりを重視する活動では、子どもの主体性はなかなか育たないのではないか。しかしながら、教育には当然、ねらいや目的、見通しが、不可欠だ。それがなければ教育とは言えない。保育者として、ねらいや目的、見通しを持ちながらも、目の前の子どもの姿を見ながら柔軟に展開する技量が、保育者には求められる。

筆者は、幼年美術の会の運営委員として、12年ほど活動している。幼年美術の会とは、幼稚園、保育園の保育者、小学校の教員、または、絵画、造形教室の開設者などが集まり、造形の研修をする会だ。実技研修の他に、幼年美術の会独自の「絵を読む会」というコーナーがある。そこでは、少人数のグループで、自分が指導した子どもの絵を持ち寄り、実践報告と、指導の中での悩み事を出し合う。筆者は、そこで司会やアドバイザーを何度か経験した。そこでの参加者の意見で多く聞かれるのは、絵画展（コンクール）向けに描く絵や、園がすべてテーマなどを決めている保育者主導型の造形活動への疑問や、養成校では子どものありのままの表現を大切に学んだのだが、現場ではなかなかそのような指導、受け止めができないギャップがあるということだ。



多種多様な現場では、園独自の方針やとらえ方がある。園の保育方針を受け止めながらも、目の前にいる子どもの姿を主体に、ありのままの表現を大切に捉え、寄り添い、おらかな心で、温かい関わりを持てる保育者を目指して欲しい。

多様な保育現場が、出来栄を重視するのではなく、子どもの主体的なあそびの中で表現されるありのままの表現を受け止める園であってほしいと筆者は願う。

## 謝辞

本実践記録の作成にあたり、桃陵乳児、桃陵保育園には多数の写真や実践例の掲載をお認め頂き感謝申し上げます。長年従事してきた桃陵乳児、桃陵保育園で保育に携わり、子どものありのままの造形、表現活動に深く興味関心をもつに至りました。ここに記して、感謝の意を表します。木村量好先生はじめ木村淳子先生、現園長の宇野豊先生、木村アサ先生、そして、たくさんの先輩保育士、同僚保育士には、保育、その中でも造形表現活動において助け支えていただき深く感謝しております。最後に、2018年度年長さくら組の子どもたち、また、支えてくださった保護者の皆様には、私の保育、造形表現の原点を改めて再確認させていただき、様々な学びを与えていただきました。心から感謝いたします。今後も子どもたちを通して発見し学んできたことを養成校の学生へ伝えることで、保育の現場へこれまでの感謝の気持ちを返していきたいと思えます。

## 参考文献

幼稚園教育要領（文部科学省告示書第62号）

松岡宏明 著 「子供の世界 子供の造形」（2017年 三元社）

佐々木正美 著 「子どもへのまなざし」（1998年 福音館書店）

倉橋惣三 著 「幼稚園真諦」（2008年 フレーベル館）